



■コラムニスト：  
三矢勝司 | KATSUSHI MITSUYA  
NPO法人岡崎まち育てセンター・りた事務局長

まちを守り、育む活動への入口はどこにあるのか。皆さんと一緒に考えてみたい。

最近のりた事業では、岡崎が育んできた歴史や文化を未来に継承すべく、歴史的な建築物の保存と活用、あるいは情緒溢れるまちなみの維持活用（空き家対策含む）に取り組んでいる。こうした事業の中で、りたは、近隣住民の皆さんに向けて学びの場、維持や活用方法に関する協議の場を企画・運営し、まちづくり活動の離陸（自立）を支援している。

そこでは「まちへの関心やまちなみへのセンス」が前提として重要である。逆に、自分のまちに関心を持ち、まちなみへの知見やセンスをもっている市民との出会い無くして、まちづくりはうまくいかない。

ところで、国内事例を見渡すと、一般の方がまちづくりに関心をもつきっかけとしてよくみられるのが「行政の都市開発が自分の望んでいる方向性と異なる場合」や「開発業者によるマンション開発が自分の住環境に悪影響をもたらす場合」に、抵抗運動としてのまちづくりが立ち上がる（まちへの関心が発露する）、というパターンだ。まちづくりの専門家として言わせてもらうならば「既に進行中の開発行為（行政であっても企業であっても）を食い止め、方向性を変えるのは大変な

## Theme テーマ：「生活芸術」

こと」である。

従って、望ましいビジョンとしては、多くの市民の皆さんが、まちづくりリテラシー（まちの見方、活かし方への知見）を高め、事前に「あるべきまちの形」を話し合っ合意し、それをまとめておくこと。更に、それに基づいて、まちの維持活用にに向けた活動が展開し、いざ行政や企業が開発に乗り出してきたときに、地域が主体となって、まちづくりの方向性について協議できる体制がとれることだ。

そうは言うものの「日頃、まちのことを考える必要性やきっかけは無いです」という感触をお持ちの方が大半であろう。

だとすると、もっと身近なこと、生活の中でまちづくりリテラシーを高める手段が必要だ。そこで、色々と思案した結果「自分の生活に（広い意味で芸術的な）こだわりを持たない人が、自分のまちに関心を持ち、こだわりのある活動を継続することは無い」という仮説にたどり着いた。

つまり、「やかんのデザインはこうでない」とか「コーヒー豆の種類から味が分かる」とか「軒先園芸のお花は香りを基準に選んでいる」とか「携帯電話の着信音はクラシックでないと嫌だ」とか「自分の手に馴染む手帳の素材はこれ」

といった、こだわりから小さなまちづくりが始まる。そして、一人ひとりの小さなまちづくりのセンスが高まり、その矛先が社会に向けたとき「こんなまちなみを残したい」とか「この自然を活かした家をつくりたい」という、大きなまちづくりへとつながる。

もちろんこれは「大量消費を前提とした消費生活・文化に抵抗できる（自立できる）市民を育む」ことでもあり、容易なことでないことは承知している。しかし、そこから始めなくては、真に望ましい岡崎まちづくりの土壌・文化を育むことにはならないことも確かだ。

対処療法的な次元のまちづくりを超えて、内発的なまちづくりへ。「こんなまちになったらいいな」の連鎖反応が生み出す豊かな岡崎づくりのために、一人ひとりの生活へのこだわりづくり、センスアップを推し進めたい。生活の中にあるこだわり「生活芸術」に気づくことの出来る市民を増やしたい。

そんな願いを込めて、今回から、りたらしい特集ページの編集方針の変更を実施する。

これは皆さんへの問いかけである。紙面を見ていただき、意見や批評をどしどしお寄せ頂きたい。

**まちなみへの関心やセンスがある市民なくしてまちづくりは成り立たない。しかしそれには、身近な「生活芸術」を見出す視点が入口として必要だ。まずは生活の中のこだわりづくりから始めよう。**

# 生活芸述

「まちづくりのWhyとHow」から、「生活芸述」へ。

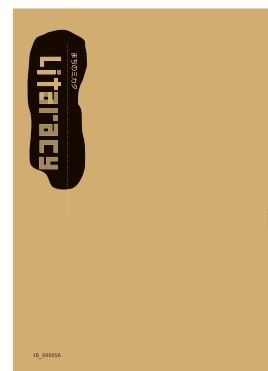
## Litaracy

「Litaracy (りたらしい)」が、今号より「なかなか読みにくかった情報誌」から、「それなりに読みたくなる情報誌」に進化しました。

これまでのメインコンテンツとしての「まちづくりのWhyとHow」は、まちづくりに関心のある人の一助になることを目指し、「まちづくりがなぜ起こり、どのようにして成されたのか」を明らかにしてきました。

これからは、一人ひとりがまちに関心を持ち始めることのきっかけづくりとして、「生活芸術」という概念を提案していきます。「生活芸術＝生活を大切に生きることから自然に生まれる芸術」。つまり、「自分の生活に関心を持つこと。こだわりを持って暮らすこと」への提案です。

まちづくりはまず自分の暮らしの視点から生まれる。そしてそのこだわりを喚起するのが新しくなった「Litaracy (りたらしい)」です。



01

### 自分らしい暮らしの「物語」づくり

昨今、京都や高山、伊勢、足助など、そこに古くから暮らしてきた人たちの暮らし方が形として残されている地域では、そうしたまちなみ(まち全体)を保全していく動きがある。

では、岡崎はどうだろうか？空襲や区画整理、高層マンション建設で、まちの様子や生活ががらりと変ってしまった。

このまちに残された歴史、そして未来について考えてみた。100年後、現代<sup>いま</sup>起きている事象は歴史にかわる。今見えている風景、自然や道路、建物、流れている音楽、着ている服、使っているものが歴史として残っていく。これから新たに創り出していくものや、手を加えていくものが歴史になってくことを意識し、未来に向けた「今」を創造していくことが必要だと思う。そう考えたときに、まちなみは、その地域性を表現する上で重要な要素になる。

ただ、まちなみは必ずしも統一された景観でなくてもよいと思うし、現代人らしいまちなみの残し方として、グローバル社会(他地域の文化、海外の文化、新しい文化、そして文明)の中から生み出されてくる個(パーソナルな部分)の価値観の集合体があっても良い。そこに住んでいる人、移住してくる人、一人ひとりが自分の「好み」や「センス」を爆発させた暮らし方から派生する建物がたくさんあるまちなみも魅力的なはずだ。

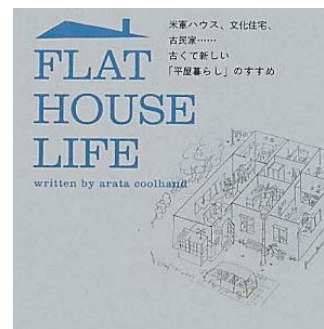
大切なことは、自分の暮らし方に向きあう「時間」と「労力」と「気持ち」を注ぐこと。

自分の住処を選ぶとき、場所、エリア、外観、間取り、インテリア、材料、窓から見える景色一つひとつに対して関心を持ち、そう決めた「Why(理由)」と「プロセス(過程)」に自分らしい意味をつくっていくことで、「自分だけの物語」が生まれてくる。

歴史的なもの、高価なもの、目立つもの、便利なものではなく「自分だけの物語」があるもの。

この「物語」が、未来に向けた歴史づくりの宝ものになる。

(Y)



02



03



04

#### 「物語」を生み出す建物

01 岡崎市六供町の古民家(大正6年)。リフォーム後はNPOの事務所としてコンバージョンされる。

#### 「物語」のある書籍

02 FLAT HOUSE LIFE／米軍ハウスを自分なりに改装。古くても新しい平屋の暮らし。

03 東京R不動産／一般的な不動産業界で扱わない「白くつき、不条件つき、残りもの物件」をカッコよくリノベーション。屋上にお風呂。幅2M以下の部屋。でも何かうらやましい。

■ SHELTER／身近な材料を使って手作りの簡素な家。アメリカ、ヨーロッパ、日本などの意味のある建築手法を紹介。ヒッピー的なノリもあり、家の定義が覆る。(Y)

#### 「物語」が生まれる建物

■ ノマド村(淡路島)／廃校になった小学校まるまる自宅に。イベントやワークショップを繰り広げ自宅を開放。

■ COMBI本陣(名古屋市中村区)／廃校になった小学校の教室がNPOの事務所に。本当の小学校の授業にもNPOが関わったらおもしろいのに。

■ 豊崎長屋再生プロジェクト(大阪)／路地を囲む大正時代の長屋4棟15戸長屋すべてを耐震・改修。お年よりも赤ちゃんも若者も暮らせる空間に変身。

■ ナゴノダナバンク(名古屋市区円頓寺)／商店街の空き店舗にオシャレなカフェやレストラン、ギャラリーが登場。(Y)

#### 04 住み開き 家から始めるコミュニティ

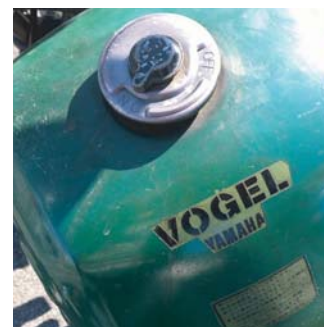
『お店でもなく、公共施設でもなく。無理せず自分のできる範囲で好きなことをきっかけに、ちょっとだけ自宅を開いてみる「住み開き」。そこから生まれるコミュニティは、金の縁ではなく、血縁も地縁も会社の縁をも超えたゆるやかな「第三の縁」を紡いでくれるはず』とは、アサダワタルさんの言葉。何気ない生活環境・住まいそのものが、実は、そこに暮らす人の歴史や文化、哲学が込められた博物館なのです。家を少しだけ地域に開いてみる、そんな些細な地域への関わり方が、自分の暮らし、あるいは地域の人との関係性を変えてくれることを紹介した本です。

(M)

#### 05 30年 — 今 — ?

今から約30年前に製造された原付。その容姿に一目ぼれして中古で買って以来、1年半快調に走り続けたが、先日、すこぶる調子が悪くなった。理由は愛情不足。チェーンが弛みきっていたのに気づかなかつたことを、先代オーナーに叱られ、すっかり煤けていた車体の手入れや油のさし方を一から教わった。磨りしきったパーツを交換してもらい、完全復調を遂げた。

走行中にオイルタンクのキャップがはずれて飛んだり、マフラーが根元から外れて爆音を撒き散らしたりもするけれど、いたわりさえすればいたって元気。時を超えて受け継がれ、遺されたから今に在る「もの」。危うくそのパタンを落とすとこだった。(A)



05



06

#### 06 すばらに人畜無害生活

洗剤や石鹸をはじめ、私たちの生活必需品には、結構おかしなものが平気で入っています。

でもこのデンシーはとってもシンプル。江戸時代から口臭や虫歯予防として使われてきたなすの黒焼き(炭)と塩を練りあわせたもので、余計なものは入っていません。自分にも環境にもやさしい人でいたいけど、面倒なことはごめんだから、せめて使うものくらいは見直さずか。そんな軽いノリで私はこれを選びました。

これが使ってみると、塩のつぶつぶが心地よいだけでなく、真っ黒なペーストで白い歯を染めるという背徳感(?)がもう、最高!

(F)